

観光の新しいスタイル、ベロタクシーで街巡り

学生起業家が取り組むエコなビジネス。函館市の西部地区を中心に、人や街との触れ合いが魅力の自転車型タクシーで、地域の元気につなげています。



株式会社トライワック北海道
代表取締役 茂呂 信哉 さん

ヨーロッパ発祥の環境に優しい乗り物

歴史ある、エキゾチックな建物群が独特の風景を織り成す、観光都市・函館市。その街並を自転車型のタクシーことベロタクシーが、早歩き程度、時速ほぼ11キロというスピードでゆっくりと走っていきます。「あれは何?」「おもしろそうな乗り物だね」。観光客を後ろに乗せ、公道を楽しそうに進んでいく姿に、周囲は興味津々。函館観光の新しい目玉として注目を集めています。

このユニークな乗り物の運行を、2008年4月から始めたのが学生起業家である茂呂信哉さん。現在、北海道大学水産学部の学生で、株式会社トライワック北海道の代表取締役。23歳にして、立派な社長さんです。

道内であれば、最近、札幌でも見られるようになったベロタクシーですが、発祥地はドイツのベルリン。



原動力は「脚力」のベロタクシー

1997年に開発され、原動力は脚力と電動モーター。環境に優しいのはいうまでもなく、エコロジーでは先進的な取り組みをしているヨーロッパを中心に運行されています。ちなみにベロとはラテン語で「自転車」を意味します。日本では2002年に京都で始まり、現在のところ北は北海道から南は沖縄まで、全国20都市以上で導入されるようになりました。

サンタの格好で1日10時間こぎ、傍ら会社設立の準備も

ところで茂呂さんとベロタクシーの結びつきは?とても気になるところです。

「僕は千葉県成田市出身ですが、自由な学風が魅力の北大にどうしても入りたくて、1度は私学の薬学系にも合格しましたが、浪人をして北大を目指しました。無事合格し札幌キャンパスを経て、2006年10月に函館キャンパスへやってきたら、周りに遊ぶ場所が無いことになりがっかり。学生なのだから、学業に専念すべしといわれても、やっぱりですね、遊びたいお年頃(笑)。五稜郭など離れた場所にすてきな店があっても、車がなくてはそう気軽には行けない。そこで中古車ネットワークを始め、就職で函館を離れる先輩の車を安価で後輩へという流れを作ったんです。例えば、はこだて未来大学の学生は主にIT関連の職に就くので、東京へ行く人も多く、卒業後車は不要となり、大学の枠を超えたネットワークを確立させました。これをきっかけにマスコミ関係の方とも出会い、次第に

面白い大人がいるな、もしかすると函館って、特に西部地区って面白いところかも、と、街に興味をわいてきて、街を変える作業をしてみたいと思うようになったんです」

地域を活性化し、「街を変えたい」という明確なビジョンを持った茂呂さんは、ビジネス養成講座で少しずつビジネスの知識を増やし、補助金の取得にもチャレンジ。たまたまインターネット上でベロタクシーのことを知り、これでいってみよう！とレポートを書いたら見事に採用され、やらなければならない状況に。2007年11、12月には仙台から車輛1台を借り、テスト運行をしました。ちょうどクリスマスシーズンでお客さんが次々と乗り、1ヶ月間の累計は約200人にも達するほど。サンタクロースの格好をして函館ならではのきつい坂も上り、1日10時間ぐらい走り、時には電動アシストが切れても車体重量140キロ、プラス人の体重分を2本の脚にしっかり感じつつこぎ続けました。同時に取り上げてくれるマスコミへの対応、会社設立準備と目の回るような忙しさ。それでもベロタクシーの運行にはしっかりと手応えを感じ、資本金1円で会社が始められる最低資本規制金特例制度を利用して会社を設立。出資者を募り、資本金137万円で会社運営の運びとなりました。

「会社を設立しなくても観光客を乗せ、ベロタクシーの運行はできます。でも僕は継続的にやることで街や社会を変えていくことができると考え、それには営利の追求は必要不可欠なので、会社設立にこだわりました。やはり昔と違い勢いの無くなってきた地域を元気にするには、外から来るお客さんがお金を使ってくれて、そのお金が地域の中で流れることが大事。僕の中では、ビジネスというツールははずせないものでした」



函館の観光名所で元気に運行中



手軽に利用できる料金設定が魅力

ゆっくり走るから、コミュニケーションできる

料金は金森倉庫、バイエリア周辺の体験乗車コースが一人500円と、とてもリーズナブル。そのほかTAXIコース、観光ガイド付きコースなど料金やコースがいろいろ選べるようになっています。

観光客の反応はすこぶる良く、その理由の一つに地域の人たちとのやりとりがあげられます。例えば漁網を扱う店の前で、作業する男性に不思議がる車上の観光客。「おじさん、何してるの？」と訪ねると、「これかい、カニかごの網直してるのさ」と飾り気のない言葉で返答。観光客は「え〜っ、カニ漁ってそんな網を使うの？」と、おどろくやら、目を丸くするやら。大型バスや車に乗っていたらなかったであろう、ほのぼのとしたやりとりが生まれます。普段着の街の人たちとの触れ合いは、観光客にとって印象深いものになっているはず。また、こうしたコミュニケーションを図ることができるのも、ベロタクシーの魅力の一つ。函館市は観光客のリピーターが高く、2度目、3度目ともなれば以前とは違うものを求めてくるのは当然のこと。従来通り、ただ恵まれた観光資源にだけ頼るのではなく、茂呂さんのようにアクションを起こし、函館の魅力を別の面から知ってもらうこともこれからの課題です。

「ベロタクシーは冬や風の強い日、雨の降る日は運行ができず、しかも函館は坂が多い。決して恵まれた条件ではなかったけれども、でも、できました。これをきっかけに、また別の何かに着手し、函館はもちろん、北海道をアピールしていきたいですね。道外から来た人間だからこそ、地元の方が当たり前と思って気がつかない魅力が見え、それを地域活性化にうまくつなげていければと考えています」

そう話す若き起業家の瞳が鋭く光りました。